17古今著聞集（橘成季）

夜も更けて

夫婦の

間柄はむつまじく

心を落ちつかせて

目くばせ

奥方

夫

そっぽをむいていたので

はた目にも気の毒なくらいである

美しい人であったが

　は、見めのよににくさげなる人ａなりけり。その北の方は、はなやかｂなる人なりけるがを見はべりけるに、とりどりに、はなやかなる人々のあるを見るにつけても、まづわが男のわろさ心憂く覚えけり。家に帰りて、①すべて物をだにも言はず、目をも見合はせず、いうちそばむきてあれば、しばしは、何事ので来たるぞやと、心も得ずろ思ひゐたるに、次第にひまさりて、かたはらいたきほどｃなり。さきざきのやうに一所にもゐず、を変へては住みはべりけり。ある日、刑部卿出仕して、夜に入りて帰りたりけるにでに火をだにもともさず、装束は脱ぎたれども、たたむ人もなかりけり。女房どもも、みな御前のびきに従ひて、さし出づる人もなかりければ、②せんかたなくて、寄せのを押し開けて、ひとり③ながめゐたるに、たけ、夜静かにて、月の光、風の音、ものごとに身にしみわたりて、人の恨めしさも、取り添へて覚えけるままに、心をすましてを取り出でて、時の音にとりすまして、

　　せのうちなる白菊も

　　うつろふ見るこそあはれなれ

　　我らが通ひて見し人も

　　かくしつつこそかれにしか

と、くり返し歌ひけるを、北の方聞きて、④心はや直りにけり。それよりに仲らひめでたく ｄなりにけるとかや。⑤なる北の方の心なるべし。

（三一九）

＊語注

＊刑部卿…刑部省（訴訟や裁判などを司る役所）の長官。

＊五節…一一月に行われた・の行事。五人の舞姫が舞う。

＊出で居…母屋の外、の間に設けられた居間と客室を兼ねた部屋。

＊車寄せの妻戸…車を寄せて乗り降りする入り口。妻戸の前にある廂の間の屋根を前に出し、その下にを敷いた。

＊篳篥…竹管に、表七裏二のがある、雅楽に用いる管楽器。

＊ませ…ませ垣。竹や木で作った、低くて目の粗い垣根。

問１　＝　線部ａ〜ｄのうち、品詞が同じであるものの組み合わせを次から選び、記号を○で囲め。

ア　ａとｂ　　イ　ａとｃ　　ウ　ａとｄ

エ　ｂとｃ　　オ　ｂとｄ

問２　―線部①･③を現代語訳せよ。

①＝〔　　　　　 　 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

③＝〔　　　　　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　⌇線部い〜はの主語を次から選び、記号で答えよ。

ア　刑部卿敦兼　　イ　北の方　　ウ　女房ども

い＝（　　　）　　ろ＝（　　　）　　は＝（　　　）

問４　―線部②･⑤の意味として最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号を○で囲め。

②　ア　気まずく　　　　イ　どうしようもなく

　　ウ　とても悲しく　　エ　ひどく腹立たしく

⑤　ア　親切な　　イ　優秀な 　ウ　風雅な　　エ　単純な

問５　四句の七五調の歌（今様）は、刑部卿のどのような心情を表したものか。それを説明した次の文の空欄Ａ･Ｂに適切な語句を補い、完成させよ。

・妻の心変わりを〔Ａ　　　　　　　　　　〕になぞらえ、夫婦の仲が〔Ｂ　　　　　　　　　　〕ことを悲しんでいる。

問６　―線部④について、それまでの「心」は、どのようなものだったのか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　夫と離婚しようと思っていた心

イ　表面的なものに気を奪われていた心

ウ　夫をうとましく情けないと思っていた心

エ　はなやかで派手なものを好んでいた心

【解答】

問１　イ

問２　①まったくものさえも言わず

　　　③もの思いにふけって座っている（た）

問３　い＝イ 　ろ＝ア　は＝イ

問４　②イ　⑤ウ

問５　Ａ＝白菊が枯れたの（枯れた白菊）

　　　Ｂ＝離れてしまった（遠ざかった）

問６　ウ

現代語訳　刑部卿敦兼は、容貌の非常に醜い人だった。（反対に）その奥方は、美しい人であったが、五節の舞を見物に行きましたときに、それぞれに、はなばなしく立派な人々がいるのを見るにつけても、まっさきにわが夫の（容貌の）醜いのをなさけなく思った。家に帰って、まったくものさえも言わず、目も合わさず、そっぽをむいていたので、（敦兼は）しばらくは、何事がおきたのだろうと、見当もつかずにいるうちに、（奥方は）ますますうとましい気持ちがまさって、はた目にも気の毒なくらいである。以前のように同じ場所にもいないで、部屋を変えて住んでいました。ある日、刑部卿が出仕して、夜になって帰宅してみると、出で居に明かりさえもつけず、装束は脱いだけれども、（それを）たたむ人もなかった。女房たちも、みな奥方の目くばせに従って、（引きこもっていて）出てくる者もなかったので、どうしようもなくて、車寄せの妻戸を押し開けて、一人で（外を眺めて）もの思いにふけって座っていると、夜も更けて、静かで、月の光や、風の音など、（ひとつひとつの）ものが身にしみて感じられ、（そのうえに）妻のつれなさも、加わるように思われたのにまかせ、心を落ちつかせて、篳篥を取りだして、時にふさわしい音色で美しく吹いて、

　　ませのうちなる…＝ませ垣の内の白菊も

　　　色あせたのを見るのは悲しいことだ。

　　　私が（愛して）通っていた人も

　　このように（菊の花が枯れるように）して心が離れてしまったことだ。

と、くり返し歌ったのを、奥方が聞いて、（夫のやさしさに）心が直ったのだった。それからはとくに夫婦の間柄はむつまじくなったということだ。風雅な奥方の心情というべきであろう。

ポイント

問１　ａ断定の助動詞　ｂ形容動詞の一部　ｃ断定の助動詞　ｄ動詞